

民衆の渴望へのアプローチ（鷹木恵子）

つづきまして、第2巻について、お話しいただきたいと思います。編者は、鷹木恵子さんがおつとめくださいました。タイトルは『越境する社会運動』で、刊行は2020年3月です。それでは、どうぞよろしく願いいたします。

鷹木：ただいまご紹介に預かりました、桜美林大学の鷹木と申します。イスラーム・ジェンダー・スタディーズ・シリーズの第2巻の編集をさせていただきました。タイトルはただいまご紹介いただいた『越境する社会運動』ですが、本日は「民衆の渴望へのアプローチ」というテーマでお話させていただきます。

第1巻が素晴らしい形で編集されており、その見本がありましたので、私たちはそれに倣って編集をすすめました。

ではまず、恐縮ですが、私の個人的な昔話から始めさせていただきます。つまり社会運動の研究に至るまでのことですが、学生時代に文化人類学を専門にしようを決めたとき、私にとっては文化をどう捉えるか、どのようにアプローチするのかが非常に大きな課題でした。その頃に多くを学んだのが、アメリカの文化人類学者クリフォード・ギアツの研究でした。その中の一冊、具体的には *The Interpretation of Cultures* という本ですが、そのなかでギアツは、「人間とは自ら紡ぎ出した意味の網目に支えられて生きる動物であり、このような意味の網目を私は文化と捉えたい。したがって文化の研究とは法則を探求する実験科学ではなく、意味を探求する解釈学的学問である」、と記しています。私はこの一節を胸に刻んで、その後、実際にフィールドワークに出かけました。たまたま私がチュニジアでフィールドワークを行った村にはたくさんのイスラーム聖者が祀られており、日本では、イスラームというのは厳格な一神教だと学んでいたわけですが、そこには全く異なる信仰の世界が広がっていたのです。そこで何とかその意味の網目を読み解きたいと考え、長い時間をかけて調査をし、その成果を本にまとめました。その後、長くお世話になった村の人たちに感謝の気持ちを込めて、本の上梓を伝えました。当たり前のことかもしれませんが、村の人々にとっては、その本の内容は何ら新しい、珍しいことではないわけです。そして、ちょうどそのころ、村にはテレビや衛星放送などが入ってきており、村人も外の世界を身近に知るようになり、少しでもより豊かな生活をしたい、あるいは子供にも満足な教育を受けさせてやりたいという想いを強くしていました。その頃、ちょうど貧困削減政策としてマイクロクレジット融資プログラムが国家ぐるみで開始されたところでもありました。そこで私は、それまでは自分の関心から研究をしていたのですが、意味の網目を読み解くだけではなく、その土地の人たちが一体どのような意味の網目を未来にむけて紡ぎたいと考えているのか、彼らが渴望していることは何なのか、できればそうした意味の網の目をともに紡ぐような人類学的研究をしたいと考えようになりました。そのころから、広い意味での開発研究に関心を移していきました。マイクロクレジットの研究、貧困削減の研究、そして民主化に関わる大きな出来事もあったので、チュニジア民主化革命についての調査研究も行いました。

そして、第1期のイスラーム・ジェンダー学のプロジェクトが始まった時に、公募研究会を担当させていただきましたが、その時には、以上で述べたような経緯から、広義の「開発」と、人々が何を渴望して社会運動を起こすのか、さらにそれがどうしてトランスナショナルに広がるのかということテーマに共同研究を組織してみたいと考えました。人々がどんな社会的な現実にも不満とか悶えを抱えており、もうひとつの意味の網目を紡ぎたいと考えているのか、そしてそうした動きが、なぜときに国や民族や言語や宗教やジェンダー、階級などの境界をも超えて大きな広がりを持つようになるのかを明らかにしたいと考えました。研究会の名称は「トランスナショナルな社会運動」研究会としたのですが、実際には運動が広がり、超えていくというその境界というものは決してナショナルなもの、国家だけではないということから、本を編集する段階では『越境する社会運動』というタイトルに変更いたしました。

本の内容は、第一部「近代化とイスラーム諸国におけるフェミニズム運動」という歴史的考察をした論文を収めた部と、第二部「越境する社会運動とジェンダー」という事例研究を収めた部から構成されています。

それでは残りの時間で、この本が出版されてから2年半ほど経ちましたので、最近どのようなことを考えているのかを少しお話し、結びといたします。この夏、チュニジアではTICAD8が開催されたこともあり、同国に2週間ほど調査に行き参りました。そしてかねてより注目していたチュニジアでは初の「女性農業協同組合」(2019年設立)という団体も訪問しました。この協同組合では、有機無農薬の農業を推進しており、具体的には現在では絶滅危惧種となっている古来の在来種、特にマフムーディ種マフムーディ種の小麦などを栽培し、クスクスやパンに加工し、フェアトレードで輸出して、また農村の貧困層の女性たちに持続可能な雇用も創出しているという団体です。スライドの右側の写真の女性がこの団体の代表のライラ・マストーリーさんです。彼女は薬草学の教授でもあります。

3. チュニジアの環境保護運動の広がり
— 2022年夏期調査の事例報告 —

- 民主化への動きの停滞の一方、環境保護運動の高まり
- 女性農業協同組合 Lella Kmar el-Baya の活動紹介



協同組合のメンバー



代表のライラ・マストーリーさん
(薬草学の教授)

チュニジアは、古代から「ローマの穀倉」と呼ばれていたように、穀物栽培や農業が盛んなところでしたが、なぜ、小麦の在来種がみられなくなったかという点、フランス植民地時代に西欧系の小麦に植え替えられたからでした。西欧系小麦の方が、収穫量が約2倍になるという理由からでした。しかし、西欧系の小麦は、収穫量は2倍でも、実は干ばつに弱く、そのため大量の灌漑用水を必要とし、また害虫にも弱いため、収穫期まで何度も農薬を散布する必要があります。肥料も大量に投入しなくては生育しません。他方、在来種の小麦は収穫量では劣るものの、干ばつや害虫にも強いので、農薬はほとんど要せず、大量の灌漑用水も必要としません。在来種のなかでも特にマフムーディ種は栄養面でもタンパク質の割合が17パーセントと非常に高く（西欧小麦は7～8パーセント）、そのクスクスやパンを野菜スープなどと一緒に食べていけば、肉食をしなくてもほぼ完全栄養食であったわけです。この女性農業協同組合では、こうした在来種を再評価し、マフムーディ種の小麦でクスクスやパンを製造したり、また在来知を生かして薬草のオイルや石鹼なども製造販売しています。

この組合のこうした在来種や在来知を再評価し、環境を保護するという考え方に共感賛同する人たち、農場主や農民、市民運動家や研究者などが加わって、現在、一つの大きな社会運動の流れが作られてきています。その動きはチュニジア国内だけでなく、近隣のイタリアやアルジェリアの団体や研究者などとも連携し、例えば、害虫対策として殺虫剤ではなく、火山灰を活用する方法なども共同開発しています。火山灰は害虫対策に加え、肥料としても効果があるとされています。また同じく女性団体の「チュニジア女性科学技術者協会(ATFI)」（2015年設立）が研究協力をしたり、イタリア・アルジェリアのほかに、セネガル、モロッコ、エジプトなどの近隣諸国の団体とも連携して、活動が展開されてきています。

今回チュニジアの「女性農業協同組合」の活動を現地調査し、あらためて考えさせられたことについて最後に述べて、終わりにしたいと思います。この本を編集した時点、あるいは研究会を開催していた時点では、私は「越境」という概念を人間集団の境界を水平的にどんどん越えていくということだけを想定していました。「越境」には確かにそうした面がありますが、今回の「女性農業協同組合」の運動では、安全な食糧や健全な食習慣の在り方を在来種や在来知を通して過去から引継ぎ、また未来の世代へもなんとかつなげて残していきたいという強い意志や渴望がそこには伺えるということです。つまり、その運動には空間軸ばかりか、時間軸も入ってきており、「越境」とは単に水平的なつながりばかりでなくて、歴史的時代や世代をも超えるという、垂直的な越境もあることに気付かされました。また最近では、「エコヘルス」、「プラネタリー・ヘルス」、さらには「人新世」という言葉などもよく耳にしますが、それらは人間を自然界の一部と捉えており、人間の枠だけでなく、人間と自然環境の境界すらも越境して、地球環境の問題を考えています。すなわち「越境」とは人間と自然の境界をも越え得る概念としても捉えられるということになります。私は最近まで「越境」の概念を人間集団の境界だけを対象に考えていたのですが、以上のような事例に出会って、いまは「越境」という概念自体を再検討してみたいと考えております。雑駁な話で恐縮でしたが、これで私からの報告を終わりとさせていただきます。

後藤：鷹木先生、どうもありがとうございました。今のお話を伺っていて思い出しましたが、2015年に長沢先生が初めてこの科研について考えをお話くださったときにはまだジェンダーという言葉も社会運動としてのそういう動きというのもほとんど強くなって、その後の「#MeToo」運動に代表されるような大きな動きがあって、それがまさに先ほど森田さんがおっしゃったイランの今にも繋がっていて、鷹木先生の仰っている時間軸という部分が大変重要だと思うと同時に、それをさらに鷹木先生は超えられて、人間だけではなくて環境という部分で今本当にクリティカルな状況にありますので、大変大切なお話をいただきました。どうもありがとうございました。